

最終報告

(2017年7月11日～2017年12月11日)

国際ロータリー第 2710 地区
2016-2017 年度 グローバル補助金奨学生
石川祐実

1. 報告書提出日：2018年2月18日 最終報告

2. 基本情報

- ・ 氏名：石川祐実
- ・ 派遣ホストクラブ及びカウンセラー：徳山ロータリークラブ、守政和浩様
- ・ 受け入れホストクラブ及びカウンセラー：Rotary Club of Redbridge, Mr. Tony Betts
- ・ 教育機関：キングスカレッジ・ロンドン
- ・ 専攻分野：国際保健（医療従事者教育）

2017年12月11日、15か月間の留学を終え、無事帰国しました。8月31日に修士論文の提出と口頭試問を終え、11月1日をもって King's College London MSc Global Health With Health Professions Education を with Merit の成績で卒業し、無事修士号を取得したことをご報告致します。卒業式は2018年1月だったので既に帰国しており出席できませんでしたが、11月に行われた写真撮影会にクラスメートと参加しました。今回の最終報告では、修士論文とその後の研究活動について、そして修士論文提出後に参加した世界保健機関（WHO）本部でのインターンシップの内容を中心にご報告させていただきます。

(写真は卒業写真と1年間共に学んだクラスメートとの写真)



3. 学業面での成果

修士論文として、“Associations between depressive symptoms and socioeconomic outcomes in an urban Sri Lankan population sample” を執筆しました。スリランカコロンボのサンプルにおいて、鬱の症状があることと同時点の負債のあるなし、鬱の症状があることと同時点の主観的な生活水準の間にそれぞれ相関関係があるかについて統計解析ソフト STATA で分析を行い、まとめました。結果は、鬱の症状があることと同時点の負債のあるなしの間には相関関係がなく、鬱の症状があることと同時点の主観的な生活水準の間には相関関係がありました。

この研究には、私を筆頭著者とする 8 名の共同研究として、指導教官とその同僚の先生方と共にデータを増やして引き続き取り組んでいます。すでに “The Effect of Mental Health on Future Socio-economic Status in an Urban Sri Lankan Population Sample: Findings from a Longitudinal Population Study” として 2018 年 3 月にニューヨークで行われるグローバルヘルスの国際学会 (The Consortium of Universities for Global Health's 9th annual conference) で研究結果を発表することが決まっています。私は国内でも学会発表の経験がないので、これが初めての学会発表です。現在発表の準備と練習に取り組んでいるところです。実りある経験となるように頑張ります。また、雑誌への投稿に向けても引き続き取り組んでおり、7 月の投稿を目指して定期的に研究チームの会議を行っています。

この研究は私にとって初めて取り組む本格的な研究でした。新しい環境での研究であり、英語で論文を書き上げなければならないということで当初は不安もありました。しかし、研究に本格的に取り組めだすとデータの分析、その解釈や考察の過程は発見の連続でとても面白く、指導教官である Dr. Lisa Aschan との議論でも新しいアイデアが浮かぶので毎週わくわくしながらミーティングへ向かいました。研究に没頭した修士論文提出前の数か月間がこの 1 年間で一番充実した時期となりました。結果的に国際学会にもアクセプトしていただくことができ、研究者としての第一歩を踏み出すことができたことを大変嬉しく思っています。(写真は 8 月に行われた口頭試問の様子)



論文の他には、ミャンマーのイーラーニングプロジェクト¹に応募する教材の開発を行いました。このプロジェクトは、オスロ大学を中心とするプロジェクトチームで、ミャンマー全土の医学部生が利用できるイーラーニングの図書館を作ろうとするものです。私たちはクラスメート3人でグループを作り、高齢化社会における公衆衛生の課題をテーマに15分間の講義ビデオを作成しました。

講義の大きな流れとしては、高齢化は進んでいくけれども、健康寿命を延ばすことによって高齢化による個人、家族、国家の負担を軽減することができる。健康寿命を延ばすために何をすればよいのか。ということ学ぶ授業にしました。教材を開発するにあたって、イーラーニング教育のメリット、デメリットを考慮し、様々な工夫をしました。例えば、一方的な授業になりがちというデメリットに対処するために、ケーススタディを取り入れました。ここではその一部をご紹介します。

右の写真のように、糖尿病になって寝たきりになってしまったAのお爺さんと同じく糖尿病を患いながらも検診で早めに気づき適切な治療や健康的な生活を心がけ元気に過ごしているBのお爺さんのシナリオを用意しました。健康寿命の違うAのお爺さんとBのお爺さんのシナリオを比較しながら健康寿命を延ばすためにはどうすべきかを実際に考えてもらうようにしました。これによって生徒が能動的に学習できるようにし、かつその後はアニメーションでシナリオの文字に色をつけるなどして一緒に答え合わせができるようにしました。

この教材はオスロとヤンゴンで行われた2度の審査を無事通過し、今年中にはミャンマー全土の医学部生の自己学習用に提供が始まるほか、健康寿命を扱う公衆衛生の授業のディスカッション教材として利用される予定です。私たちの作成した教材が、ミャンマーの医学部生の学習に使ってもらえるのはとても嬉しいです。

(写真はイーラーニング教材の一部)

Public health needs of population groups
Health of older people

KING'S COLLEGE LONDON, MSC GLOBAL HEALTH
YUMI ISHIKAWA, MARINA HAMAGUCHI, RIBEKA HORIGUCHI, MARCH 2017

Case A

- 50 years-old
He experienced dry mouth, limb swelling and increased urinary frequency but he ignored these. He kept eating unhealthy food. He has never tried exercising.
- 55 years-old
His feet turned black. He was diagnosed with diabetic gangrene. He quit his job due to an amputation.
- 60 years-old
He started dialysis due to diabetic renal failure. A few months later, he developed a stroke. He became bedridden. As his condition progressed, he required home visits and attendant services.
- 70 years-old
He was admitted to intensive-care unit (ICU) with aspiration pneumonia.
- 72 years-old
He was transferred to convalescent wards.
- 75 years-old
He had recurrent aspiration pneumonia and died.

Case B

- 50 year-old
He was diagnosed with Diabetes Mellitus in regular check up.
- 60 year-old
He retired from a teaching job, but he started doing volunteer lectures in schools. He started walking for 1 hour every morning. He tried to eat healthier foods. He went to the hospital regularly for checkups of his glycemic control and for complications. He never had complications.
- 65 year-old
He created a community action group to improve regional security and adolescent lives.
- 75 year-old
He died a peaceful death.

TASK3:
What actions are required to extend HALE?

¹ [http://www.thelancet.com/journals/lancet/article/PIIS0140-6736\(16\)32520-X/fulltext](http://www.thelancet.com/journals/lancet/article/PIIS0140-6736(16)32520-X/fulltext)

4. WHO 本部でのインターンシップについて

修士論文提出後 2017 年 9 月から 3 か月間、スイスのジュネーブにある WHO 本部の Health workforce department にてインターンシップをしました。今回のインターンシップでは、主にユニバーサルヘルスカバレッジを達成するための Global Competency and Educational Standards Framework を作成するプロジェクトを担当しました。

このプロジェクトの目的は、ユニバーサルヘルスカバレッジの達成に向けて保健医療人材教育の側面からアプローチすることです。主にミッドレベルの保健医療人材を対象として、ユニバーサルヘルスカバレッジの達成に必要なケアを 1 年間～4 年間の教育で効果的に行うための指針となるフレームワークの作成を目指しています。WHO、WHO 以外の国際機関や大学などから集まった 10 人でチームを結成し、共同でプロジェクトを進めました。このプロジェクトはインターンシップの開始とほぼ同時にスタートしたので、文献調査やどのようにフレームワークを作成していくのかを検討するところから始めました。その後、チームでここまでのプロジェクトの過程を論文にまとめ、The 4th Global Forum on Human Resources for Health で発表しました。

Health workforce department は 2008 年以来、保健医療人材の課題に対する解決策を見つけるために国際学会を主催してきました。第 4 回目となる The 4th Global Forum on Human Resources for Health は、2017 年 11 月 13 日から 17 日までの期間アイルランドのダブリンで開催されました。医療、教育、労働/雇用そして財政などの分野の政策立案者や現場の実行者 1000 人以上が一堂に会しました。私もこの学会に企画・運営の一員として参加し、学会内のイベントの企画や Global Competency チームとしてプロジェクトの発表を行いました。

WHO でのインターンシップは、将来目指す職場で職員の方々がどのように働いているのか、自分に足りないものは何かを確認する良い機会となりました。また、WHO での仕事の面白さも実感することができ、将来ここに戻ってきたいという気持ちを強めることができました。(写真はいずれも WHO の上司や同僚との写真)



5. 参加したロータリー活動

イギリスやロンドンの奨学生全体のイベントとしては Warwick にて開催された Link Weekend 2016、ロンドンにて開催されたアフタヌーンティーを兼ねた奨学生歓迎パーティー、Eastbourne にて開催された Rotary District 1130 Conference に参加しました。このようなイベントでは、同じ専攻分野で違う大学に留学している奨学生と知り合うことができました。今年度は、ロンドン全体のロータリーのイベント企画担当の方が年末から体調を崩されており、例年よりロンドン全体でのイベント開催が少なかったようです。そのため年明け以降は大人数で集まる機会はほとんどなかったのが残念でしたが、上記のイベントで知り合えた奨学生たちとは研究の進み具合やロンドン市内で開催される国際保健分野のイベント情報、そして就職活動に関する情報などを共有することができ、モチベーションを維持することができました。

年明けからは受け入れホストクラブである Rotary Club of Redbridge やその他招待してくださったクラブの coffee morning や定例会に参加させていただきました。そこでは留学の近況や進路についてお話させていただきました。ローリアンの方々はいつも暖かく迎えてくださり、「学生生活は楽しいか、困っていることはないか」と気にかけてくださいました。(写真は Link Weekend 2016 と Rotary Club of Redbridge の定例会の様子)



6. 今後の課題、キャリア目標

今後は、まず大阪大学国際公共政策研究科の修士論文を書き上げ、キングスカレッジの修士論文と大阪大学の修士論文の両方が雑誌の掲載に至るよう論文の執筆に引き続き注力します。2018年4月からは WHO 本部の Department of Information Evidence and Research でコンサルタントとして勤務することになりました。今後3年間は WHO やその他関連機関で経験を積みながら PhD を取得し、将来的には WHO の正規職員を目指したいと希望しています。

7. 帰国後のロータリー活動への参加

2018年2月15日には推薦クラブである徳山ロータリークラブの定例会に参加させていただき、留学の成果を報告しました。報告の中では、ロンドンでの学生生活や取り組んだ研究の概要、そして参加したロータリー活動とその様子などをお話しました。発表後は「これからも頑張ってください。応援しています。」と皆様から暖かい言葉をかけていただき嬉しかったです。

また、今後は学友としても今留学されている奨学生やこれから留学に行かれる方のサポートを積極的に行っていきたいと思います。昨年6月には2017/18年度の奨学生のオリエンテーションにロンドンからスカイプで参加させていただきました。今後もイギリスに留学される方は多いと思うので、イギリスでの学生生活のアドバイスなど、今後の奨学生が実りある留学期間を過ごせるよう、お手伝いしていきたくと思っています。

(写真は徳山ロータリークラブの定例会の様子)



8. 今後の奨学生への助言

ヨーロッパで修士号取得を目指される方の多くが1年間でコースワークと修士論文の執筆の両方を完了させることになると思います。実際にはこれに加えてインターンシップを含めた就職活動、学会発表や雑誌の投稿を目指すのであればその準備にも力を入れなければなりません。私の場合は、今では数時間で書ける簡単なレポートも、留学開始当時は何日もかけて取り組まなければならないなど、何をすることも思った以上に時間がかかってしまいました。目標に向けてタイムスケジュールを立て、早め早めに取り組むことが重要だと感じました。

また、留学期間中に会う人たちには是非自分から積極的に声をかけてみてほしいと思います。私は留学開始直後から、ロンドンのお寿司屋さんや焼き肉さんを調べて、ランチやディナーにクラスメートを誘って行っていました。その他にも、クラスの集まりがあるときは差し入れに日本食や日本のお菓子を持っていくことにしていました。特に手作りの巻き寿司が好評でした。そのうち中国人が美味しい飲茶のお店を見つけたり、イタリア

人が学校に近くのピザ屋さんに連れて行ってくれたり、いつの間にか定期的に食事に行く大きなグループができてクラス中がとても仲良くなれました。WHO のインターンシップ中にも WHO の職員の方や近隣の国際機関の職員の方 30 名以上の方とお茶やランチをご一緒させていただきました。周りの人たちと仲良くなることで、そこでの生活がとても楽しくなりますし、多くのことを学ぶ機会となると思います。特に”食”と”おしゃれ”はみんなが関心のあるテーマだと感じました。「また日本食レストランに一緒に行こう」と言われることもありましたが、日本で買った服を着ていると、「それも日本の服なの？何ていうお店？オンラインでも買える？」と聞かれたり、「日本人流のメイクを教えて欲しい」と言われて一緒にメイクをしたりしました。日本のものを持っていくと話のタネになるかもしれません。

(写真は春節祭にクラスメートと飲茶でお祝いした様子と感謝祭のホームパーティの様子。右の写真の右下が手作りの巻き寿司)



9. おわりに

15 か月間を振り返ってみると、私の人生の中で一番充実した期間を過ごさせていただくことができ、確実に将来の目標に近づくことができた 15 か月間となりました。最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださったロータリー財団委員会の皆様、国際ロータリー第 2710 地区事務局の皆様、カウンセラーの守政和浩様をはじめ徳山ロータリークラブの皆様、カウンセラーの Mr. Tony Betts をはじめ Rotary Club of Redbridge の皆様、全てのロータリアンの皆様、その他関係者の皆様はこの場を借りて厚く御礼申し上げます。今後は、グローバル補助金の OG として少しでも本事業の発展と継続に貢献していきたいと考えておりますので、今後とも何卒よろしくお願い致します。